



日本音楽教育学会ニュースレター 第95号

目次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第55回大会の予告..... 野本由紀夫 2
2. 第25期を振り返って..... 齊藤 忠彦 2
3. 編集委員会からのお知らせ..... 今田 匡彦 3
4. 第11回ワークショップ「義太夫節（人形浄瑠璃文楽の音楽）に親しむ」報告
..... 石上 則子・新妻 知明 3

〈ワークショップ参加記〉

- 1) 第11回ワークショップ「義太夫節に親しむ」に参加して..... 市川 恵 4
- 2) 義太夫節に親しむ」に参加して一ひとバチで芝居心を表す..... 上原 正士 4

2 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校 (32)
ドラえもん的世界の先へ..... 八木 正一 5

3 会員の声

1. 日本音楽教育学会での出会いと学び..... 井上 翔太 6
2. 文化の芽生え—県民ミュージカルに参加して—..... 藤井 菜摘 7

4 会員の新聞・近刊等紹介..... 8

5 報告

1. 2023年度 日本音楽教育学会 第4回常任理事会・引き継ぎ会..... 9

6 事務局より..... 15

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第55回大会の予告

大会実行委員会委員長 野本 由紀夫

日 時：2024年10月19日（土）、20日（日）

場 所：玉川大学教育棟 2014

玉川学園前駅（小田急線で新宿駅より30分、JR・小田急線町田駅の隣の駅）徒歩5分

第55回大会は、玉川大学で開催されることになりました。何度か会場校のご依頼がありながら、音楽校舎の改築や、学部再編や学科再編などが続いたため、今回ようやくお引き受けすることができました。

昨年10月に玉川大学の常勤教員のみで実行委員会を開き、大会へ向けての準備をスタートさせ、ほぼ内容や人選が決まってきたところです。今回の大会は、玉川大学の附設校（K-12＝小中高）の「歌に始まり、歌に終わる」玉川の全人教育や、教員養成を5学部の核に据えた「教育の玉川」としての開催校の特色を生かし、STEAM教育（玉川では英語教育を付け加えたESTEAM教育といいます）やロボット工学との融合（STREAM棟があります）などの切り口で内容を検討しています。大会実行委員会企画は、シンポジウム「音楽科教員の現状とこれからの教員養成」を予定しています。ICTどころか、いまやAIの時代となり、そもそも「芸術とはなにか」が根本的に問われている時期、これからの音楽や教育はどうあるべきか、問題意識を共有できたら、と考えています。

久しぶりの、東京での対面実施になります。エクスカージョンとして、本学教育博物館における「ガスパール・カサド&原智恵子」コレクションの展示や、科学技術と音楽の融合としてのスタインウェイの録音機能付き最新自動演奏ピアノ「SPIRIO|E」のお披露目演奏会も企画しています。たくさんの皆様のご参加をお待ちしております。

2. 第25期を振り返って

2022年度～2023年度事務局長 齊藤 忠彦

今期（第25期：2022年度～2023年度）をざっと振り返らせていただきます。2022年度の国立音楽大学での大会はオンラインで開催されました。津田正之実行委員長、瀧川淳事務局長をはじめとする実行委員会の皆様による丁寧で確実な運営により成功裏に終了しました。2023年度の弘前大学での大会は4年ぶりに対面で開催されました。今田匡彦実行委員長、小田直弥事務局長をはじめとする実行委員会の皆様による安定感のある運営により成功裏に終了しました。2023年度の第26期会長・理事選挙は、本学会で初となる電子投票を導入したのですが、山本幸正選挙管理委員長をはじめとする委員の皆様のお力添えにより無事に終了しました。他にも、音楽教育ゼミナールやワークショップ、日韓実践交流会の開催、『音楽教育学』、『音楽教育実践ジャーナル』、『ニュースレター』、『会員名簿』の発行など、常任理事や理事、そして各種委員の皆様のご尽力により、各業務を無事に遂行することができました。権藤敦子会長、有本真紀副会長には、学会の今、そして将来に向けてのあるべき姿を常にお考えいただき、学会運営を見事に舵取りしていただきました。菅道子常任理事には事務局長補佐として多大なサポートをしていただきました。事務局スタッフの皆様（宇田川さん、亀山さん、徳山さん、若尾さん ※五十音順）を含めまして関係されるすべての皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様には日頃より学会運営にご理解とご協力を賜り誠にありがとうございます。引き続き、よろしく願いいたします。

3. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 今田 匡彦

2023 年度開催された4回の編集委員会は、すべて対面での検討ができました。〈人は人と接することを望む〉というのはあまりにもカント的な考え方もかもしれませんが、人間の心は、どうやら脳科学や超弦理論とはちょっと異なるところにあるようなので、音楽教育を扱う学会誌の編集は、やはり avatar には任せられないという結論になりそうです。そうこう言っているうちに、私が編集委員長として担当する最後の学会誌『音楽教育学』第53-2号が、みなさまのお手元に届くころかと思えます。研究論文2本、研究報告2本、研究動向1本、大会報告と、充実した1冊となりました。

さて、先程カントを少し持ち上げてしまいましたが、彼は音楽教育的には大変問題の多い哲学者です。ヨーロッパ18世紀、所謂科学主義・啓蒙の時代に、カントは神の代替として芸術家を神聖視します。彼の否定神学は〈天才〉〈神童〉という概念を世に送り出したのでした。ポピュラー音楽を含む市場経済下の今日の音楽が、このカントの呪縛から脱していないことはさて置き、音楽教育学は、たとえば、カント的な潮流とは逆に、多様な子どもたちに目を向けます。つまり私たちは、18世紀、19世紀の西欧音楽文化が排除してきた他者性を研究している、とも言えるのです。このような否定神学を批判する研究は、20世紀のポスト構造主義、そして最近のポスト・ポスト構造主義の十八番です。しかしながら、現代思想の最先端はやはり、子どもや、音楽教育には関心がありません。だからこそ、音楽教育学が今後のアカデミアに果たす役割は大きいのです。などと、少々アンビシャスに考えると、投稿意欲が湧いて来たりしませんかね？

4. 第11回ワークショップ「義太夫節（人形浄瑠璃文楽の音楽）に親しむ」報告

ワークショップ実行委員 石上 則子・新妻 知明

2023年12月2日（土）、杉並区立阿佐ヶ谷中学校にて「第11回ワークショップ」を開催いたしました。会員に限らず誰もが参加できる開かれたワークショップであったため、多くの非会員の方もご参加くださいました。

午前は、鶴澤友之助氏（三味線）と豊竹芳徳太夫氏（太夫）、鶴澤燕二郎氏（ツレ三味線）による講演と演奏が行われました。「義太夫節は、声と三味線で情を表現する。登場人物によって声の抑揚を変えたり、三味線の音色・テンポ・リズム・音程を変えたりする。」と演奏する際の工夫を、実践を交えながら具体的にお話しされました。「新版歌祭文 野崎村の段」の解説では、演奏する際に「この音を合図に太夫が呼吸をする」「登場人物の距離感を表すため、間の取り方を短くする」など約束事がかなり綿密に決められていることが印象的でした。午後は、義太夫節で使われる太棹三味線の体験ワークショップが行われました。普段触れる機会の少ない三味線の持ち方や撥の扱い方に苦戦しながらも、参加者全員が三味線を演奏することができるようになっていきました。アフタートークでは、講師の来歴や義太夫節の魅力、普段どのような演奏活動をされているかといったお話があり、今後の義太夫節の発展や継承への可能性を知る機会となりました。

参加者からは、中学校の授業で扱いやすい三味線の活用方法や、義太夫節を習える教室についての質問が上がり、義太夫節への興味・関心が高まっている様子が見られました。

参加者の皆様にはもちろんのこと、会場校の阿部みどり先生はじめ杉並区立中学校の先生方には全員参加を前提にご協力いただきました。末尾ではありますが、心より感謝申し上げます。



〈ワークショップ参加記〉

1) 第11回ワークショップ「義太夫節に親しむ」に参加して

市川 恵 (東京藝術大学)

文楽ワークショップに参加し、鶴澤友之助さんと豊竹芳穂太夫さんのお話と、義太夫節と三味線の実技体験を通じて、改めて文楽の魅力に触れることができました。

まず、実演を交えたお二人の軽妙なやり取りは非常に面白く、時間が経つのを忘れてお話に引き込まれていきました。特に友之助さんが仰っていた「三味線の一音はまるでLINE スタンプのよう」という比喻が印象的でした。つまり、太夫の語る言葉にたった一音添えるだけで、多彩な喜怒哀楽の情を表現し、その言葉をより一層引き立てるといいます。その一音をどのような音色や強さで弾くか、そしてどのようなタイミングで弾くか、それによって聴いている人への伝わり方は大きく異なります。一音のもつ力というものを改めて実感しました。また、様々な役柄に応じて声を使い分け、それぞれの感情を豊かに表現する太夫の多彩な声遣いにも驚きました。セリフに音色、リズムや緩急が加わると、途端に眼前にその人物や光景が現れるようでした。文楽の魅力である物語性や深い感情表現は太夫と三味線の絶妙なコラボレーションによって生まれているのだと深く納得しました。

企画、運営して下さった実行委員の先生方、素晴らしい会場を提供下さった杉並区の先生方、大変貴重な機会を本当にありがとうございました。

2) 「義太夫節に親しむ」に参加して—ひとバチで芝居心を表す—

上原 正士 (熊本大学教育学部附属小学校・非会員)

第11回ワークショップ「義太夫節(人形浄瑠璃文楽の音楽)に親しむ」では、鶴澤友之助さんと豊竹芳穂太夫さんを講師、鶴澤燕二郎さんを指導助手にお迎えして、演奏や講話、演奏体験が行われました。文楽において、太夫も三味線も、音の高さや強弱などの音楽の要素を微細に操り、人形の感情や場面の様子を豊かに伝える役割があることがわかりました。

特に印象に残ったのは、友之助さんの「ひとバチで芝居心を表す」という言葉です。三味線は単なる伴奏ではなく、三味線の音一つで場面の様子や物語の展開を表しているということを実演と共にご説明くださったのですが、まったく別の様子が目の前に現れるように感じました。人形浄瑠璃文楽という総合芸術の重要な一翼を三味線が担っているということを改めて実感することができました。

また、伝統的な演目を演奏する活動の他に、新しい演目をつくることにも取り組んでおられることもお聞きしました。伝統の継承と共に、現在の時代・文化・人などの要素で新たにクリエイティブしていく活動をととても楽しみながら取り組んでおられる姿は、真のプロフェッショナルだと感じました。

学習指導要領の改訂の趣旨において、「我が国や郷土の伝統的な音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにすること」が課題として示されていますが、私はこの研修を通して、文楽を授業で取り上げる着想を得ることができました。特に、「ひとバチで芝居心を表す」という視点は、一音にこだわって演奏・鑑賞する子どもたちの姿を引き出す鍵になると思います。今後も文楽を様々な角度から研究し、音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育む教育実践へとつなげていきたいと思っています。



2 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (32)

ドラえもんの世界的先へ

八木 正一 (聖徳大学)

40年も前になるだろうか。PC-9800 シリーズが発売された。新しい時代が始まる予感とともに、争うように買ったものだ。それから40年、IT技術のこれほどの進化を正確に予想できた人はそう多くはあるまい。この1年間で考えてみても、チャットGPTの登場からはじまり、「AI安全サミット」で生成AIのあり方について国際的な議論を行うまでに、ITをめぐる状況は一気に進んだ。長い間、技術の進歩の先に明るい未来を見てきた私たちは、それとは逆の景色にも直面しているようだ。

学生たちに聞いてみることもある。これから先、IT技術やAIが発展すると、音楽に関してどんなことができるようになるだろうか。学生からドラえもん的な答えが返ってくる。「イメージしたことが瞬時に音楽で表現できる」「その時々体調に合った音楽を聴かせてくれるヘッドフォン」「ショパンの曲が自由に弾ける魔法の手袋」等々。これらはすでに実現しているか、実現の秒読み段階にある。まさに、ドラえもんの世界が現実化し、その先におぼろげなく見えている風景をより鮮明にしなければならぬ時代に私たちは生きていることにもなる。

このように考えると、私たちが学校の音楽教育を通して子どもたちに身につけてほしいと思っていることのほとんどは、IT技術がたやすく実現してくれるような気もしてくる。現在の学校音楽教育やさまざまな場での音楽教育における内容や活動の、何が残るのだろうか。大胆に考えてみよう。

少し前までは、IT技術がいかに進化しても、子どもたちが他者と関係を紡ぎながら音楽活動をするといった、音楽学習の原点だけは残るのではないかと思っていた。しかし、これも覚束ない。遠くない時期に実際の人間と同じ質感や熱感をもった子どもや教師のアバターが登場し、仮想空間で学習を行う状況が生まれるだろう。とすれば、他者とのリアルな関係の中で成り立つ音楽活動とその意味は不易であるという信念は、単なる願いにすぎなくなる。すべての楽器を超小型のコンピュータで子どもたちが自由に操る時代のすぐ手前に私たちは立っている。何が残るかという問いに、何も残らないという答えが返ってきそう。そもそも、学校という物理的空間すらその存続は怪しい。仮に存続するとしても、その機能は劇的に変わるだろう。

今やAIの発達で、肉体的には死を迎えても人格は生き続けることが可能になると言われる。まさに価値観の根源が揺さぶられる想像すらしてこなかった局面に私たちは立たされているようだ。想像を絶するような技術の発展の前では、「何が残るか」という発想は無力に近い。この発想は、ITにできるものはITに任せる方が効率的だという楽天主義につながる。そして、この楽天主義は、進行する現実にと簡単に飲み込まれてしまう。一度、何も残らないと考えてみることによって始めて発想はドラスティックに展開する。今、私たちに求められているのは、「何が残るか」ではなく「何を残すのか」を真剣に議論することである。それはまず、理論的根拠をもって新しい教育内容を構築することを意味する。その際、これまでの常識、考え方をゼロベースで問い直すことが何より重要な作業となろう。少なくとも学校音楽教育に関する研究において、これは必須の作業となる。

エッセイとは言え、空想が過ぎたかもしれない。しかし、IT技術の発展が、音楽教育の世界にも大きな決断を迫る日は遠からずやってくる。だから、「何を残すのか」の議論は重要なのだ。技術発展の早さを考えれば、猶予している時間はさほどはないだろう。

3 会員の声

1. 日本音楽教育学会での出会いと学び

井上 翔太（広島大学附属三原中学校）

大学の附属中学校に転勤し、本学会に参加させていただき3年目となった。私自身、音楽科の授業実践、教科教育研究について知識・経験不足であり、このような素晴らしい学会に参加させていただけることに大変幸せを感じている。また、この度ニューズレターに寄稿をさせていただけると聞いて、大変恐縮しながら文書を書いているところである。私のこれまでの学校教員としての勤務は大学卒業時に恩師よりご紹介いただいた特別支援学校から始まった。私にとって初めての勤務であり、毎日右も左も分からず困惑することばかりであった。しかし、そのような中でも生徒は「井上先生」と敬意を払って呼んでくれることに対して、少しくすぐったく感じる一方で、使命感をもって勤務しなければならないと自分に言い聞かせていたことを覚えている。

最初に勤務した学校は病弱教育を専門とする特別支援学校であった。その学校では、特別支援教育における音楽科の授業は、音楽は生徒が生きている喜びを実感できる幸せな時間を創り出すものであると感じた。その学校の生徒は、学校に登校できる生徒から自宅で学習をする生徒、医療的ケアが必要で床上学習（教員が病院に出向き、病院のベッドで寝たきりの生徒に授業を行うことを当時そのように呼称していた）をする生徒まで様々な状況であった。私は床上学習においてフルートや声楽の演奏のピアノ伴奏を行っていた。その中で生徒は全身で音楽を感じ、その生徒なりに全力で感情を表現していた。中には、体が不自由で自力で動かすことができない生徒もいたが、音楽の授業においてはその生徒なりの表現があり、そのことを教師があたたかく評価することで何とも言えない幸せな空間が創り出された。その生徒の微細な表情の変化からは、音楽を共体験することはその生徒が確かにそこに存在し、全力で生きていると実感できるような素敵で時間を創り出すものであるように感じた。大学で理論として勉強していた音楽科教育の大切さが実感として感じられた瞬間であった。

特別支援学校から公立中学校、そして大学附属学校への転勤となり、音楽科の授業実践、教科教育研究、また附属学校であるがゆえに毎年多くの教育実習生の指導を行う中で「音楽科での学びの深まりとは何だろうか」「そもそもこの授業でそのような学びの深まりにつながるのだろうか」など、私自身の教育観に悩むことが増えてきた。そのような中で常に新たな視座をくださるのが、日本音楽教育学会での出会いと学びであった。音楽科の授業実践をしていく中で何度も読ませていただき、参考にさせていただいた本の著者の先生方、大学での紀要論文作成にあたって参照した先行研究の著者の先生方など、私にとってはこの学会でなければ絶対にお会いすることのできないような先生方に先日の弘前大学での大会でお話させていただく中で、音楽科教育についての私の悩みの答えにつながることを数多くかつ幅広く教えていただいた。この学会で学んだことを日々の授業実践や教科教育研究に生かし、生徒の豊かな学びにつなげられるように精進していきたい。

現在の研究関心は、音楽科教育における創造性について、音楽鑑賞における日本の伝統音楽の鑑賞の在り方についてである。私の授業実践や教科教育研究は生徒にとって幸せな時間を創り出すものになっているであろうかと反省をしつつ、今後は私自身も音楽は生きている喜びを実感できる幸せな時間を創り出せるものであると感じられるように研究を進めていきたいと考えている。

2. 文化の芽生え—県民ミュージカルに参加して—

藤井 菜摘 (九州龍谷短期大学)

文化庁によると、文化は「人間が人間らしく生きるために」「人間相互の連帯感を生み出し、共に生きる社会の基盤を形成するために」極めて重要なものとされています。過日 2024 年 1 月 7 日に SAGA アリーナにて上演された、佐賀県民ミュージカル《佐賀の夜の夢》に、出演者および講師として関わらせていただく中で、私は、新たな文化の芽生えを目撃することとなりました。

ミュージカル《佐賀の夜の夢》は、ウィリアム・シェイクスピアの『真夏の夜の夢』を原作とし、佐賀の幕末を舞台として書き換えた、人間と妖怪が織りなすラブコメディです。ミュージカルというと、芝居をしながら歌い踊るキャストのイメージが大きいかと思いますが、今回の出演者オーディションの枠には、キャスト、アンサンブル、コーラス (のみ)、ダンス (のみ) という 4 つが設けられており、コーラスやダンスの枠は「経験不問・1 曲からでも参加可能」と謳って募集がなされました。

オーディションを経て、全キャスト 200 名ほどのうち、コーラスのみの出演という方は 60 名ほどとなりましたが、年齢層も幅広く (親子で参加された 2 歳の女の子から 80 歳オーバーの方まで!)、経験の差としても様々な背景を持った方 (音楽大学出身の方、バンド活動をされている方、カラオケが好きな方、楽譜は全く読めないけど何かにかチャレンジしたくていらした方などなど) が集まりました。年齢の幅や経験の差が多分にある中で、最初は当然、個々人がバラバラだったのですが、徐々に冒頭に挙げた「人間相互の連帯感」が生まれてまいりました。いま振り返ると、その鍵となったのは、お一人おひとりが、この集団のために何ができるかを考え主体的に動いてくださったことのように思います。例えば、ピアノを弾ける方は練習にキーボードを持参して弾いてくださり、歌が得意な方はご自身の声を録音して練習用のパート音源をつくってくださり、事務的なことに長けている方は自主練習の場所をサッと予約してくださり、人と人を繋ぐことが得意な方は衝突が起こりそうなところで調整をしてくださいました。また、そういった方々の動きを受けて「経験はなかばってん (ないけど) やる気はあるよ!」という方は、とにかくご自身での練習を重ねられました。ある主婦の方は、お料理をしながら練習できるように、歌詞を書いた紙と、ピアノのアプリを入れた iPad を台所の壁にかけて練習していらしたとか。練習期間の 8 ヶ月間、最初は手探りだった個々人が、だんだんと「集団になっていく」過程をご一緒させていただきました。

今回のミュージカルの母体となったのは、「ミュージカル県 SAGA プロジェクト」という取り組みです。このプロジェクトは、昨年新たに SAGA アリーナがオープンしたことを契機とし、佐賀の文化芸術がさらに発展することを掲げて発足したものです。つまり、ミュージカル《佐賀の夜の夢》の公演 1 回限り成功したかどうかではなく、次に繋がるかどうかをより重要視しております。そして、本番と解散式が終わった今、ミュージカルで一緒に歌ったメンバーが出演するコンサートやライブに、互いに足を運んでいる様子がみられます。仲間が出演しなければ足を運ぶほどの興味がなかったというジャンルのものにも人が行き来しており、そこから新たな出会いの可能性を感じております。さらに、主催ではなく出演者の方から、街のイベントで歌おうという声も挙がっています。

人が集まる場所からしか文化は生まれません。ここに芽生えたばかりの新たな文化を、これからも大切に育てていきたいと思っています。

4 会員の新刊・近刊等紹介

★沼口 隆・安川 智子・齋藤 桂・白井 史人編著／山本 耕平他著『ベートーヴェンと大衆文化—受容のプリズム—』春秋社 2024/1/15 四六判・328 頁 ISBN : 978-4-393-93231-5 [本体2,800 円＋税]

20 世紀のメディアの中でベートーヴェンはどのように表現されてきたのか。文学作品から映画、教材、テレビ番組に至るまで、さまざまな位相で大衆文化へと拡散していった「ベートーヴェン像」に迫る。

★井口 太・水崎 誠編著『改訂版 最新・幼児の音楽教育—幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導—』朝日出版社 2024/1/31 B5 判・234 頁 ISBN : 978-4-255-15725-2 [2,750 円 (税込)]

幼児期の望ましい音楽的表現を目指すことを希求したテキストの改訂版。理論編と教材曲集から成る。今回新たに「教育要領等の変遷と音楽」「幼児と音の環境」「音楽的表現の 11 の事例解説」を取り入れている。

★笹野 恵理子・学校音楽文化研究会編著／磯田 三津子・上野 智子・大越 良子・檜下 達也・菅 道子・小山 英恵・杉田 政夫・須田 珠生・多賀 秀紀・西島 千尋・山本 耕平他著『学校音楽文化論—人・モノ・制度の諸相からコンテクストを探る—』東信堂 2024/2/28 A5 判・368 頁 ISBN : 978-4798918945 [本体4,500 円＋税]

学校音楽教育には、制度の「教授—学習」の枠組みを超えたダイナミックな「生きた姿」が存在する。そこには新たな「教育」のポテンシャルが内在している。「学校音楽文化」の視角から教育の新たな地平を拓く書。

ニュースレターでは「会員の近刊・新刊等紹介」「会員の声」への皆様のご投稿をお待ちしております。書籍、CD、DVD などのリリースの情報がありましたら、基本的な書籍情報、音源情報に加えて「である調」90 字程度の紹介文をお送りください。

投稿先アドレス☞ (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

次号のニュースレターはオンラインでお届けします！

2024 年5月発行ニュースレター第96 号はウェブ版のみのお届けです。

学会ウェブサイトの「マイページ」にアクセスしてご覧ください。一般公開用は従来通りトップページからご覧いただけます。紙媒体での次のお届けは 2024 年8 月の第97号を予定しております。

どちらのニュースレターにも多くの会員の皆様からのご投稿をお待ちしています。

5 報告

1. 2023 年度 日本音楽教育学会 第4回常任理事会・引き継ぎ会

日時: 2024 年 2 月 4 日 (日) 9 : 30 ~ 12 : 00 ※ 11 : 30 ~ 引き継ぎ会

場所: オンライン開催 (Zoom)

出席: 榎藤, 有本, 齊藤, 今川, 菅 道子 (記録), 木村, 笹野, 嶋田, 菅 裕, 杉江, 寺田,
本多, ※ (新常任理事, 会計・企画担当理事より) 伊野, 小川, 中嶋, 檜下, 長谷川, 山下

【会務報告】〈2023年10月13日以降〉(齊藤)

2023 年 10 月 13 日	2023 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会
10 月 14, 15 日	日本音楽教育学会第 54 回大会・総会 (弘前大学)
10 月 22 日	2023 年度第 3 回編集委員会 (立教大学)
12 月 15 日	日本音楽教育学会会員名簿 2023 発行
12 月 18 日	ニュースレター第 94 号発行
12 月 31 日	『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 21 発行
2024 年 2 月 4 日	2023 年度第 4 回常任理事会 (Web 会議)
2 月 12 日 (予定)	2023 年度第 4 回編集委員会 (聖心女子大学)

【MLでの報告・審議事項の確認】〈2023年10月16日以降〉(齊藤)

<報告>10月22日

- ・韓国音楽教育学会チェ・ウンア会長より弘前大会の御礼状が届き、2024年の韓国音楽教育学会全国大会は8月に全州市で開催する予定であると連絡があった。

<審議>11月11日

- ・『音楽教育実践ジャーナル』投稿チェックリスト改正が承認された。
- ・倫理WGのメンバー (小田直弥・榎藤敦子・杉田政夫・西島央・船越理恵) が承認された。

<報告>12月8日

- ・『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』について、EBSCOのデータベースに登録する見通しができたため、既刊の執筆者の意向や質問がある場合には1月22日までに事務局に連絡するようニュースレターで広報した。
- ・国際交流委員会により、学会HPの英語版が校閲を経て公開された。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について (齊藤)

2023年10月13日総会以降の新入会員 (正会員 9 名, 学生会員 1 名), 再入会希望 (正会員 1 名), 申出退会 (正会員 4 名), 申出退会予定者 (正会員 8 名) について, 審議の結果承認した。また, 会費納入がない場合, 次年度には2年間の滞納により自然退会となる66名について, 可能な範囲で声掛けをすることとした。

(2024年2月1日現在 正会員1,566 名 学生会員 5 名 名誉会員 1 名 特別会員 4 名)

◆正会員 新入会員 (2023年10月13日理事会以降)

個人情報保護のため削除いたしました。

正会員新入会 10名

◆学生会員 新入会員 (2023年10月13日理事会以降)

個人情報保護のため削除いたしました。

学生会員新入会 1名

2. 2024年度補正予算案にむけて (寺田)

総会時の予算案からの補正として、正会員および特別会員 1,570名とする会費収入と「予備費」の増額、学会基金の「資料保存・アーカイブ化」の減額および「学会企画研究推進事業費」の新設が提案され、承認された。

3. 第55回大会について

① 開催日程および大会概要、大会実行委員会企画 (野本→齊藤)

2024年10月19日(土)、20日(日)に玉川大学にて対面で開催されることが承認された。

② 大会準備日程 (齊藤)

資料に基づき大会準備日程についての説明があり、4月1日には研究発表応募・発表要旨テンプレート、大会概要を学会HP上に掲載し、Web申し込みができるよう準備を進めること、研究発表申し込み・要旨登録、共同企画申込みの締切を5月31日に設定すること、あわせて年会費の支払いについても大会申込みWebサイトにて処理できるよう(4月1日から10月31日15時まで)検討していることも含めて説明があり、審議の後、承認された。

③ 正会員大会参加費 (齊藤)

大会参加費について、会員は事前申込みの場合4,000円、当日参加申込みの場合4,500円、学部学生会員の場合1,000円とすることが承認された。

非会員の参加費については、大会実行委員会にて検討していただき、2月後半までに最終決定することについて承認された。

④ 大会研究発表応募要領 (齊藤)

大会研究発表応募要領については、前年度を踏襲することが提案され承認された。また英文での申込みの可能性もあるため、その場合には二段組でなくてもよく、英文用のテンプレートも作成し、

日本語用のテンプレートと合わせて学会HP上に掲載することが提案され、承認された。

⑤大会参加登録システム（齊藤）

資料に基づき説明がなされ、システム利用料が4月開始で1ヶ月早まり費用があがることなどもあるが、これまで実績のある東武トップツアーズと契約することが提案され、承認された。2024年度は、既に説明にあった通り、年会費申込みについても申込Webサイトでの手続きを可能とすることで、会員の支払い手続き（海外からの入金者等）の利便性を図ることの説明があった。

⑥ 大会実行委員会との覚書（齊藤）

資料に基づき説明がなされた後、実行委員会においても内容について確認、了解いただくことを前提として承認された。

⑦ 大会の発表に関する内規（齊藤）

資料に基づき説明がなされ、承認された。

⑧ 大会日程等（企画）

大会日程については、実行委員会からの提案を参考に、発表件数等も勘案した上で、4月以降に企画担当常任理事が最終的に提案することが確認された。

⑨ 常任理事会企画プロジェクト研究（企画）

4月以降に、新体制の担当者のもとで企画・提案していただくということで、継続審議となった。

4. 会費の納入方法について（榎藤）

上の「3」「②・⑤」で審議してきたように、申込Webサイトに、新たに年会費納入のボタンも加え、年会費納入の窓口も開設し、4月1日から10月31日15時までの期間、支払い手続きができるようにすることが提案された。また、従来通り紙媒体での振込み手続きも行うということで提案があり、審議のうえ、承認された。

5. 第18回（2024年度）音楽教育ゼミナールについて（企画）

4月の新体制になった後、新しい企画担当理事から企画案を提案するというので、継続審議となった。

6. EBSCOとRILMについて（榎藤）

資料に基づきこれまでの交渉経緯について説明があり、RILM本部ならびにEBSCOとの契約について承認された。これにより、『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』が総合検索プラットフォームであるEBSCOの学術情報データベースに収録され、国際的に閲覧可能となる。J-STAGEでのオープンアクセスに際し、既刊のデータベース掲載の許諾確認をしているが、今回も2024年1月22日を期限として執筆者からの問合せをニュースレターで呼びかけた。これから次年度にかけて発刊されるものについては個別に確認をするが、今後は「両学会誌掲載の論文等は、国際的なデータベースにより公開される」ことを学会として明示する必要がある。そのため、「編集委員会規定」を改正し、第3条内にその内容を含めて条文を加筆、あるいは別に条項を設定してすることについて検討することが承認された。あわせて、実際の運用にあたっては、論文データの送付等手続きの窓口となる担当者グループ（編集委員会、国際交流委員会、事務局他）を組織する必要があるため、引き続き関連委員会等で検討することについても提案があり、承認された。

7. 年間事業計画の見直しについて（榎藤ほか）

年度を超えた送付物が宛先不明で不着となるケースが今年度多数生じたため、とくに3月の発送物に関わるスケジュールの見直しが提案された。具体的には、次年度より、『音楽教育学』については現在よりも10日程度前倒して、3月上旬納品となる日程を検討すること、ニュースレターについては、2025年3月よりオンライン発行にすることを検討する。

選挙については、紙媒体からオンライン化への移行期には日程に余裕が必要となるため、今年度は従来よりも選挙結果の報告が1か月遅くなっている。選挙管理委員会および事務局とも検討した上で、選挙資格者・被選挙資格者名簿の作成にあたって必要となる「改選年度の2年前の会費の納入」確認を、現在の5月31日から4月30日とすることが提案され、承認された。今後、「選挙実施要項」の改正について継続して審議することとなった。

【報告事項】

1. 第54回大会（弘前大学）会計報告（今田→齊藤）

資料に基づき適正に会計業務がなされ、監査も実施されたことが報告された。

日本音楽教育学会第54回大会収支報告

A【収入の部】		決算	
費目	金額(円)	備考	
学会本部からの準備金	700,000		
弘前市コンベンション観光協会助成金	300,000		
企業協賛広告収入	240,000	9社	
企業ブース出展収入	80,000	4社	
情報交換会参加費	500,000	5,000円×100名	
臨時会員参加費	208,000	5,000円×31名 3,000円×16名 1,000円×5名	
利息	24	8月10日付	
収入合計	2,028,024		
B【支出の部】			
費目	金額(円)	備考	
施設使用料	0		
大会ホームページ制作費	100,000	謝金	
大会ポスター・大会プログラムデザイン費	50,000	謝金	
情報交換会費	478,765	軽食代	
弁当代	91,559	アルバイト及び実行委員会昼食代	
実行委員会企画経費	250,034	パネリスト謝金, 交通費, 宿泊費, 文字起こし等	
会議費	31,250		
大会備品・雑費	40,024	除菌ウェットティッシュ, 養生テープ, 封筒, ゴミ袋, ペン等	
通信費	11,110	郵送料, 振込手数料等	
学生アルバイト賃金	703,000	アルバイト41名 3日分(前日準備, 大会当日)	
観光コンベンション協会紙袋	40,000		
学会本部への返金	232,282		
支出合計	2,028,024		

上記の通りご報告いたします。
2024年1月15日 事務局長(会計) 小田直弥

上記の通り相違ないことを監査いたしました。
2024年1月23日 会計監査

武内 裕明
高橋 憲人

2. 第11回（2023 年度）ワークショップ 会計報告（今川）

充実したワークショップが実施され、適正に会計処理がされたことが報告された。

第11回ワークショップ会計報告

収入

項目	内訳	金額
ワークショップ経費	(学会本部より)	200,000
参加費	会員(10名),非会員(10名),杉並区(21名)	46,000
弁当代		1,079
収入計		247,079

支出

項目	内訳	金額
謝礼		187,072
実行委員交通費		18,748
昼食		12,948
楽器運搬	搬入・搬出	24,600
文具等	のし袋・名札シール等	3,466
学会へ返金		245
支出計		247,079

ワークショップ実行委員のメンバー

(石上則子・石井ゆきこ・江田司・川邊友里絵・阿部みどり・飯島千夏・新妻知明・米倉幸子)

3. 2023 年度会計中間報告（寺田）

資料に基づき現時点まで適正な収支状況であることが報告された。

4. 各委員会等報告

① 編集委員会（今田→今川）

第 53-2号については1月末に入稿完了し、研究論文2本、研究報告2本、研究動向1本他等が掲載される予定であること、また改訂された執筆の手引きが掲載されるとの報告があった。

2023 年度第4回編集委員会は2月12日（月）に聖心女子大学で対面により開催予定。研究論文5本、研究報告1本、論考2本（内1本は修正再査読）、書評1本、ジャーナル自由投稿1本について掲載の可否を審議する。

② 国際交流委員会（菅 裕）

英語のHPが完成し、稼働していること、今後は、新しい年会費の振り込みの方法についての紐付け方について検討することが必要との報告があった。

③ 広報委員会（笹野）

第95号NLの編集作業中であること、第93号NLの誤印刷については、印刷所の謝罪文とともに再掲載される予定（その部分の経費は印刷所負担）であるとの報告があった。

④ 選挙管理委員会（山本→齊藤）

資料に基づき、今期の電子投票の経過と引き継ぎ事項について報告があった。

⑤ 音楽文献目録委員会（長野→齊藤）

資料に基づき、今期の活動状況について報告があった。

⑥ 資料の保存・アーカイブ化 WG (杉江)

資料に基づき、今期 WG の業務報告と今後の課題について報告があった。

⑦ 教科教育学コンソーシアム (伊藤→齊藤)

資料に基づき、教科教育コンソーシアム第3回理事会の内容について報告があった。

⑧ 学会企画研究推進 WG (今川・杉江)

資料に基づき報告があり、今後引き続き検討を進めることとなった。

WG のメンバー (今川恭子, 杉江淑子, 伊野義博, 今田匡彦, 笹野恵理子, 嶋田由美)

⑨ 倫理 WG (権藤)

12月17日に第1回ミーティングを開催、2月10日に第2回の開催が予定されている(いずれもオンライン)。既刊の執筆者に修正確認を行うとともに、現代的な課題についての加筆を検討中。なお、具体的な編集作業に取り掛かるため、倫理ガイドブック編集委員会と名称を変更する。

5. その他

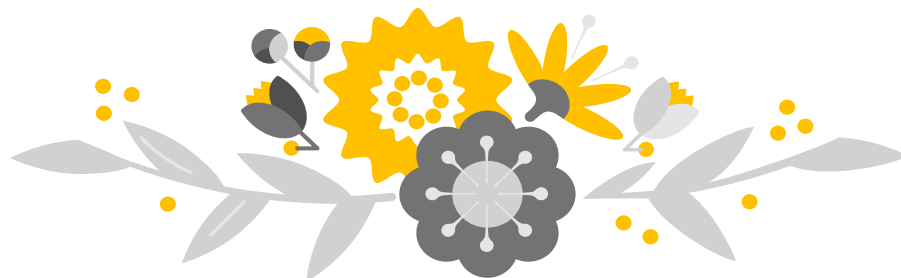
2024・2025年度の役員・委員について報告・了承された。

〈次回会議の予定〉

2024年度第1回常任理事会	2024年4月21日(日) 10:30~12:00	於 聖心女子大学
2024年度第1回理事会	2024年4月21日(日) 13:30~15:30	於 聖心女子大学

✉ 学会からのメール配信を試行しています。

日本音楽教育学会(送信専用) no-reply@mail.jmes.me のアドレスから届いた連絡(地区例会案内など)がもし迷惑メールに入っていましたら、内容をご確認のうえ、「迷惑メールではない」と設定してください。次回から受信トレイに届くようになります。



6 事務局より

事務局長 齋藤 忠彦

1. 第55回大会について

第55回大会は、2024年10月19日(土)、20日(日)に玉川大学にて対面で開催します。大会参加費は4,000円(正会員・事前申込)です。研究発表(「口頭発表」「ポスター発表」)及び共同企画の応募方法は同封の「2024年度 第55回大会研究発表応募要領」をご覧ください。なお、2024年4月1日(月)に「申込 Web サイト」(学会 HP からリンク)を公開する予定です。詳細につきましては、同サイトを確認ください。

2. 年度会費納入のお願い

2024年度会費は7,000円、納入期限は2024年5月31日です。期限内に納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。2年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。大会での発表を予定されている方は、2024年度までの会費を5月31日までに必ず納入してください。新規入会し発表することを希望される方も5月31日までに入会申込書と会費納入を完了してください。会費納入後、約2週間で事務局より年会費振込の確認メールを自動送信します。メールが届かない場合は事務局までご連絡ください。なお、「申込 Web サイト」(前掲)から年度会費も納入することができるシステムを新規に加える予定です。詳細につきましては、同サイトをご覧ください。

3. 会員情報(所属先・住所など)の変更について

所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会 HP「会員個人専用ページ(「マイページ」)」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

【編集後記】

2024年のはじまりは痛ましいニュースが続きました。能登半島地震により被害に遭われた皆様へ、心からのお見舞いを申し上げます。

さて、笹野広報委員会委員長のもと、今期(2年間)の委員会が終わろうとしています。今号は第25期広報委員会の最後の仕事となりました。ご執筆いただいた皆様、そして、ご協力くださいました皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。また、会員の皆様には、本誌がよりよいものとなるよう、ニュースレターへのご意見、アイデア等、お寄せいただけましたら幸いです。そして、これからも皆様からのたくさんのご投稿もお待ちしております。(村上 康子)

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax.: 042-381-3562

E-mail：(半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座：00110-6-79672, 日本音楽教育学会

他金融機関からの振込：ゆうちょ銀行, 〇一九(ゼロイチキュー)店, 当座0079672, 日本音楽教育学会

開局日時：火・木 10:00~15:00

事務局員：宇田川・亀山・徳山・若尾